
川内康範作『太陽は撃てない』の帰着点

— 劇映画、テレビ映画、連載小説から少年向け反戦小説へ

名嘉山リサ

— 要旨

川内康範は、1960年代前半に、劇映画の原案、テレビ映画の脚本、連載小説、少年雑誌の連載小説の4つの異なる『太陽は撃てない』という作品を執筆した。戦争を描いた劇映画とテレビ映画は製作・放映されず、戦争に至るまでの状況等を描いた連載小説も完結しなかったようだが、戦死した父親の遺骨を探しに沖縄に行くという内容の少年雑誌に連載した小説は唯一完成した作品である。本稿はそれぞれの『太陽は撃てない』を概観し、少年小説版を分析する。戦死した兵士は犬死したのではないというメッセージが込められた本作は、大人の登場人物が川内の思想を代弁しつつ少年の「父親捜し」の物語が展開するだけでなく、グラフ雑誌ならではのビジュアル資料や読者からの手紙を使った情報の提示も行われている。つまり、少年小説版では、子供の遺族の思いや戦中戦後の沖縄の様子が物語の外側からも紹介され、フィクションとノンフィクションが合わさった、特異なテキストが構成されている。

はじめに

1941年にデビューし、作家、脚本家、作詞家、政治評論家として多くの著作を残した川内康範(1920～2008)は、数多くの映画やテレビのシナリオや原案・原作を手掛けた⁽¹⁾。1958年に大ヒットしたテレビドラマ『月光仮面』の作者として有名だが、敗戦直後は、海外抑留者の救済運動に携わり、その活動の過程で行った取材をもとに留守家族の実態を描いた小説『生きる葦』(1952年)を発表している。その運動が一段落したころからは、戦没者の遺骨収集運動にかかわることになり、私財を投じて8年ほどかけてマレーシア、クアラルンプール、スマトラ、フィリピン、インドネシア、ベトナム、ラオス、カンボジアで遺骨収集をしているが、その発端は、1951年の映画製作のための沖縄訪問だという⁽²⁾。

大映の永田雅一社長から沖縄戦を映画にしようと言われ、その取材で沖縄を訪れた川内には、海軍陸戦隊員として戦死した山本正夫という友人の遺骨を探すという別の目的もあった⁽³⁾。大映などの映画を沖縄で配給していた宮城嗣吉(沖映社長)の案内で沖

縄本島南部の洞穴に入った川内は、たくさんのころがっている遺骨を見て、沖縄ですらこうであれば東南アジアにはどれだけの遺骨があることかという思いに駆られたという⁽⁴⁾。

沖縄での取材後、川内は、糸満にある自然壕（轟の壕）から多数の避難民を救出した宮城の体験談をもとにした沖縄戦映画の原作を大映に提供した。大映は1961年にロケハンをし、撮影の準備は整っていたのだが、撮影協力を依頼していた米軍の協力が得られず、結局映画は製作されることはなかった⁽⁵⁾。しかし、映画製作が頓挫した後も、川内はこのテーマと題名にこだわり続け、タイトルを変えずに、テレビ映画、連載小説、少年向け連載小説と、4種類の異なった内容の『太陽は撃てない』を執筆し、作詞もしている⁽⁶⁾。

本稿では、1961年に撮影予定だった劇映画版、1963年に撮影が開始され放映予定だったテレビ映画版、同年に発表された連載小説版、1964年に発表された戦後沖縄が舞台の少年小説版の4種類の『太陽は撃てない』を概観し、少年小説版を中心に分析する。この作品は、楽曲版を除くと、最後に発表された『太陽は撃てない』ということになるが、川内の遺骨収集の原点となった沖縄南部の壕での体験が生かされた作品となっており、沖縄戦のテーマに回帰している。また、劇映画版（脚本）とは違い、同時代的な描写が加わり、戦争のテーマに加え、戦後の状況や冷戦下の新たな脅威についての言及がみられるバージョンとなっている。少年向けグラフ雑誌というメディアならではの表現法についても考察し、川内がこの時期にライフワークと称した『太陽は撃てない』に込めたメッセージや作品の特異性についても明らかにしたい。

1. 劇映画版『太陽は撃てない』

川内の原作は出版されていないため、ここでは脚本を参照し、宮城嗣吉の戦争体験をもとにした劇映画版『太陽は撃てない』の内容についてみていく。

物語は1945（昭和20）年5月の首里にはじまるが、映画の冒頭では、以下の記述がテロップで流れる予定であった。

戦争によつて失われたものは大
きい。
だが、忘れてははならない――。
戦乱の中に咲いた愛の美しさを。
この血と涙の体験を地上に生か
すべく、今、我々の世界が失い
つつある愛の物語をこゝに贈る。⁽⁷⁾

ここに記されている「愛」は「人間愛」など広義の愛も含まれているだろうが、プロットとしては、主人公宮城明（兵曹長）とベリー（その妻）の夫婦愛が軸となっている。ベリ

ーはハワイ出身の日系二世で、二人はハワイで出会い一緒に沖縄に戻ってきたという設定である。戦況がひどくなり、近隣の若妻が機銃掃射で息絶えると、最後に夫に会いたいと、ベリーは一人で宮城ら軍属がいる陣地へ赴く。宮城は妻を安全な場所に送り届けるよう命令され、ベリーを連れて持ち場を離れる。宮城はベリーにハワイに戻ることを勧めるが、彼女はそれを聞き入れず、宮城と運命を共にする覚悟である。二人は島田知事らが待機している場所にたどり着き、そこでいったん別れる。軍属も避難民も皆南に向かい、のちに二人は偶然再会するが、すぐに引き裂かれる。そしてベリーは米軍に保護され、轟の壕に避難している住民に出てくるよう呼び掛ける役を仰せつかる。壕の中には宮城もおり、上官たちに阻止され傷を負いながらも最後には自ら壕の外に出ていき、避難民たちは救出され、ベリーとの再会を果たす、というのがあらすじである。

実話にもとづいた映画として、クライマックスではこの夫婦の功績が描かれているものの、劇映画として、戦場での男女の愛の物語が強調された構成になっている。その中に、戦闘の激しさ、地元の軍人と県外から来た上官たちの軍属間の緊張感、軍人と民間人が入り乱れた沖縄戦末期の状況などの要素がちりばめられている。

この脚本で興味深いのが、上記のテロップと映画のタイトルが現れたのちのクレジットの部分で、現代の沖縄列島の映像がオーバーラップされ、次のナレーションが入ることである。

沖縄全島——野に、山に、海辺に、幾千幾万の屍が、島の土と化している。あの日、あの時、私たちはその屍のとなりにいた。……明日を求め、飢え、渴えて、まだ生きている屍のとなりに——⁽⁸⁾

脚本がどの程度原作に忠実かは定かではないが、戦争で犠牲になった人々の身体が強調されていることは、川内の遺骨収集活動への強い意志との関連性が見いだせる。また、沖縄を舞台にした映画では定番の青い海や観光地と米軍基地が現れたのちに戦闘シーンが配置され、このナレーション同様、現在から過去を眺めるというようなオープニングになる予定だったようである。しかし、前述したように映画は製作されず、川内原作の『太陽は撃てない』は世に出ることはなかった。

2. テレビ映画版『太陽は撃てない』

テレビ映画版『太陽は撃てない』は、1941（昭和16）年10月から1962（昭和37）年10月までの20年間にわたる青山（サラリーマン）、菊池（八百屋）、岡村（軍人）の三家族の人々の生活を描いた大長編テレビ映画で、30分番組を1年間、52回連続放映という計画が立てられていた⁽⁹⁾。川内はテレビ版を1962年から書き始めたようだが、代表作の『月光仮面』を発表した1958年頃にすでに構想はできあがっていた⁽¹⁰⁾。また、作品のテーマ

は10年間あたためていたもので、「テレビ映画と小説の二面作戦で国民にうったえる」と意気込んでいた⁽¹¹⁾。そうだとすると、永田から映画化の話を持ちかけられ沖縄で取材したころから、映画版とは別の構想を同時進行で描いていたということになるだろう。

1963年8月7日付の『毎日新聞』では、本作が以下のように紹介されている。

これは太平洋戦争ぼっ発直前の昭和十六年秋から現在にいたる物語で、ある一族の生き方を通して、日本人が経験した歴史的な大事件をふり返り、戦争はなぜ起こったか、民族愛とはなにか、われわれは戦争による犠牲を無にしていないか……といった問題を追究するもの。ことばをかえていえば、二十世紀前半の“日本民族小史”にしようという意欲作だ。

具体的には、連合国側の日本に対する経済的な圧迫、戦争回避のための日米交渉の時期にはじまるが、戦争中の部分では、日本が劣勢になってからの陸海軍の特攻隊、東京空襲などがヤマになる。⁽¹²⁾

1963年8月15日に撮影が始まり、少なくとも7回分の撮影が終了し、同年10月中旬には試写が予定されていた⁽¹³⁾。監督は元新東宝の中川信夫⁽¹⁴⁾、出演者は、山本礼三郎、細川俊夫、小林昭二、稲垣美穂子、小山源喜、武智豊子、東野英治郎、水戸光子、綾川香などで、製作は6・3プロダクション（埜邑プロデューサー）、スポンサーは山城製菓で、川内は撮影現場で総指揮にもあたっていた⁽¹⁵⁾。

後述する少年向け小説が掲載された『ボーイズライフ』という少年雑誌では、連載が始まる直前の1963年12月号でテレビ映画版が取り上げられ、特攻隊に入るために家族に別れを告げに来た八百屋の息子が家族や恋人と別れるシーンや、特攻機で攻撃するシーンが、おそらく脚本の抜粋あるいは再構成という形で、写真付きで紹介されている⁽¹⁶⁾。8ページほどにわたる特集で、最初のページの隣には、戦車や戦闘機のプラモデルの新製品が紹介されているページがあり、少年雑誌ならではのテレビ新番組の紹介の仕方になっているといえる。また、「特攻隊メモ」という特攻隊に関する説明文が挿入されているところに、戦争を知らない十代男性の読者をターゲットにした本誌の教育的側面も垣間見える。

しかし、新聞や雑誌で大々的に紹介されたにもかかわらず、その後本作はテレビで放映された記録がなく、撮影は打ち切られたと思われる。同時期に川内原作・脚本の『戦友』というテレビ映画が放映され高視聴率を上げていたが、戦争ものは製作費が高額になるため、それほど予算をかけられないテレビにとって不利であったことや、戦争体験者と非体験者の両方の視聴者を満足させるのは難しかったという指摘がなされている⁽¹⁷⁾。『太陽は撃てない』も同様の理由で製作が行き詰ったのではないか。

3. 連載小説版『太陽は撃てない』

小説版『太陽は撃てない』は、1963年10月号の『論争』という雑誌で連載が始まっている⁽¹⁸⁾。1963年9月号に掲載された「筆者のこぼれ」にその全体像や特徴と意気込みや意図が述べられている。

(一) 本作品は、昭和十九年十月末より、昭和三十七年十月末まで（あるいは今日までの）約二十年間の時代背景をもととして構成される。登場人物は数組の家族。従って、その構成人数は、明治・大正・昭和の三代。とくに、昭和は二代にわたっての、思想的変転の在り方を示しながら物語りを進行させる。

(二) 今日、弱小民族が流血の果に独立し、自国の旗を愛国の名において守る、その民族的プライドを、十九年前の日本の青年たちも持っていたことを確認する。ただし、前線描写の偏向を避け、その父母、弟妹の肉親愛を軸として、一種のホームドラマ的構成をもって、戦時下・終戦・占領下そして現代へと移行させながら日本の悲劇の物語りを展開させる。

(三) 日米開戦からソ連参戦、そして今日までの世界の戦争と平和の動きを通じて、その谷間にうごめく民族の欲望の悲劇を浮彫りにし、はたして「力は正義」であるかどうか……への疑問を最終的に打ち出したい。そのためには、国際裁判によって示された、戦争犯罪と人道犯罪の二つの定義を今日の現実と対比させて、広く世界に訴えたい⁽¹⁹⁾。

設定はテレビ版と類似しているが、登場人物も物語も異なっており、政治評論家でユダヤ・フリーメイソン研究家の私（岡村茂樹）、民俗学者の平木利勝、岡村の妹のセツ子とその家族の間で話が展開する。毎回「本篇は純粋な意味での小説ではない。小説の概念や範疇の外で語られる、小市民的私版の民族史としてお読みいただきたい。（筆者）」との但し書きが最初のページに記載されているように⁽²⁰⁾、物語としてのまとまりよりも、亜細亜民族の政策に関与した政府諮問機関の一員であった平木の挫折や「私」と平木の思想的対立を描くことに重きが置かれている。そして、テレビ映画では直接伝えることが難しい詳細な歴史的背景や川内の思想などをこの連載「小説」では扱っている。以下に第3章までのあらすじを記す。

連載第1回は「序章」で、平木の死から始まる。肺結核が死因であったが、私は自殺であると確信している。平木の経歴や私と平木の出会い、家族ぐるみでの付き合い、そこから生まれた友情や、平木と妹セツ子の婚約が語られる。そして、私と平木の思想的断絶があらわになった、大学教授陣や政治評論家、軍事評論家が会した、内閣諮問機関メンバーによる意見具申会の様子が山場として描かれ、日本はソ連と手を組むべきだと主張する平

木に対し、独伊と組むべきという意見が多数派となり、平木と私の友情も冷めていく。

第2回(第1章)では、日本が独伊と同盟を結んだ数日後に平木は東京を去り旅に出る。私には何の連絡もなく、婚約者のセツ子に送られてくる葉書で私は平木の近況を知ることになる。全体主義的風潮が文芸の上にもあらわれるようになるが、その間私は平木とのやり取りを反芻し、自分の過ちに気づき始める。この章の大半は半ば歴史書のように、私の考えや平木の手紙を通して、世界情勢や戦争論、正義と力は別であるというような思想論が展開する。

第2章で、平木は東京に戻り、セツ子や私と再会する。日米交渉が難航する中、平木と私は以前のように議論をし、また仲たがいしそうになる。私にはニューヨーク在住の新聞記者の叔父がおり、その叔父からの手紙で、一般には報道されないアメリカ側からみた日米交渉の様子や「アメリカの真の姿」すなわち「デモクラシーの衣裳をまとった帝国主義」⁽²¹⁾を知ることになる。平木の考える解決法は「支那に頭を下げて引き退る」⁽²²⁾ということで、私と平木の二度目の論争が起こる。

第3章では、日米交渉の決裂後真珠湾攻撃が起こり、平木は婚約者のセツ子を連れて福島で暮らすことになる。昭和20(1945)年3月に、東京に向かっていたセツ子は米軍機の攻撃に会い惨死する。それから17年後に平木が死亡し、日記を手に入れた私が以下のように述べ、この章を締めくくる。「平木の日記の重要な部分を抜萃し、列記しながら、これに私の感想や反論を併わせて、戦中戦後、二十二年間にわたる私たちの、生成と発展と顛落の小史を綴ってみたいと思う。」⁽²³⁾

第3章の最後の部分と「筆者のことば」から、次章以降で戦中戦後について描かれる予定だったと思われるが、本雑誌はこの号をもって廃刊となったようである。いずれにせよ、川内が述べているように、「小説」として人物描写や物語を深めることよりも、登場人物や手紙を通して、戦前の情勢や川内の考える平和や歴史認識を論説のような形で表明している部分が多く、第4章以降が書かれていたならば、この傾向がさらに強まったのではないかと思われる。

4. 少年向け連載小説版『太陽は撃てない』

そして『論争』の連載開始から3か月後、『ボーイズライフ』という少年雑誌で新たな『太陽は撃てない』の連載が始まる。『ボーイズライフ』での連載は1964年1月号から1964年5月号までの5回で、1963年12月号には、『月光仮面』で全国の読者を熱狂させた川内先生が、構想十年で放つ一大戦争ロマンだ!』というキャッチコピーと、長文の「作者のことば」が掲載されている。

この作品の題名である「太陽」とは、人間の、愛、真実、正義の代名詞であります。いま、世界に権力をほこる国々は、かつて、日本の戦争責任を東京裁判で裁きながら、

真実は破られない……ということをや叫んだのですが、いつの間にかそれを忘れて、彼等自身が「太陽」を撃とうとしております。これはあやまりであります。

世界の歴史は、このあやまちをくりかえしてきました。日本も、いまから十八年前にそれと同じことをしました。しかしそれには、それなりの理由があったわけです。それを知るためには日本の歴史を知らなければなりません。同時に、日本の戦争を知るためには、世界の歴史を知ることになるわけです。

あなたたちは、あなたたちの父母や兄たちの歴史を正しく知る必要があります。どうして日本はバカだといわれるような戦争をしたか？なぜ兄や叔父たちが特攻隊を志願して行ったか……自分たちの父や母が、いかに戦ったか……知っておいてもけっしてむだではないでしょう。それを知るということは、あなたたち自身の血に流れている家の歴史を知ることです。

今日の平和は、多くの人々の犠牲の上に建てられたものです。しかも、なお、日本の外から、戦争の危機がいつやってくるかもしれない……という悲しむべき時代が今日なのです。その人々は「太陽」を撃てると考えているのでしょうか。私は撃てない——と信じているひとりとしてこの物語を書くのですが、みなさんもいっしょになって「真実」の旗をふってください。すみきった空の青さをよごす者たちと戦い——それに参列しているつもりで、どうぞ私を励ましてください。⁽²⁴⁾

『論争』の連載で描いてきたような歴史認識へのこだわりや、大国批判、テレビ版で強調されていた特攻隊へのシンパシーが読み取れ、他のバージョンでは強調されていない、同時代の世界情勢に対する危機感が表明されている。新連載の紹介というよりも、継続的に不戦を訴えていた川内が少年たちに伝えたいことをストレートに語りかけけるような内容となっている⁽²⁵⁾。

そのほかの『太陽は撃てない』との共通点が見いだせる一方で、本作は当時の少年雑誌界における戦記ものブームとも呼応している。1962年から63年にかけて児童雑誌・少年雑誌が相次いで統廃合されたところに、少年雑誌に戦記ものが頻りに描かれるようになるが、川内の『月光仮面』などに見られた正義対悪の構図がなくなり、民族主義的な傾向、特に「偏狭な愛国主義に立脚した正義感」が強調されるようになったという⁽²⁶⁾。『ボーイズライフ』は1963年3月(4月号)に小学館が創刊した、日本で初めての「グラフと読み物の十代男性雑誌」で、スピード・スリル・サスペンスを中心に、外国誌との特約による編集がなされ、実用性・資料性にも重きが置かれた、13～17歳を対象とした雑誌ということである⁽²⁷⁾。『太陽は撃てない』が連載された号の目次を一瞥しただけでも、「戦記特集」「自衛隊」「零戦」「少年航空兵」「予科練物語」「特攻兵」というような言葉が頻出していることがわかり、物語中だけでなく玩具の宣伝ページなどにも戦車や戦闘機などの兵器が頻りに登場する。構想に10年をかけた作品ということは、時代が川内に追いついたともいえるが、その他のバージョンと一味違う少年小説版は、川内がこのブームをうまくとらえた結果生まれたと

もいえるだろう。

前述したように、本作はテレビ版や『論争』の小説版と違い、宮城とともに壕に入り遺骨収集をした体験がベースになっており、1961年に宙に浮いてしまった沖縄戦がテーマの『太陽は撃てない』が、形を変えて戻ってきたということになるだろう。しかし、映画版と違い、本バージョンは、戦後の沖縄が舞台で、沖縄戦に加え、東西冷戦や米統治下の沖縄にも言及しており、駐留している米兵も登場する。本連載の概要は以下のとおりである。

連載の第1回は、「沖縄の空は暗紅色にけむっていた。昭和二十年四月一日、午前五時三十分を期して米軍の攻撃が開始されたのだ」⁽²⁸⁾ という沖縄戦の描写で始まるが、それは主人公の母子（相川きよと保夫）が観ていた『沖縄の最後』と題する、アメリカの撮影班が撮った記録映画だったという設定になっている。その映画の中には、米艦船に次々と体当たりする特攻機や、戦場を逃げ惑う避難民も登場する。母親がその映画の中に、沖縄で戦死したとされる夫の正夫を見つけるが、保夫は見逃してしまう。保夫の父と母は、働いていた軍需工場で知り合い、父が招集された2日前に結婚したため、保夫は父の顔を写真でしかみたことがない。16歳で間もなく中学を卒業する保夫は、小学6年生の時友友に、戦争で死んだ兵隊はバカだと侮辱され悔しい思いをし、それ以来本当にそうなのかと疑問を抱いていた。

保夫とキヨは上映終了後、映画館の支配人に頼み、保夫の祖父も一緒にもう一度記録映画を観る。保夫の父が映っていたことが再確認されると、映写技師に沖縄で戦った元兵隊（木下）を紹介してもらい、その人物のお得意さんで沖縄映画社社長の宮城嗣吉と羽田空港で会う手配をしてもらう。

保夫の父は摩^ま文^{ぶん}仁の洞くつ（壕）の奥で死んだかもしれないということがわかり、保夫は沖縄に父の遺骨を探しに行く旅費を稼ぐためアルバイトを始める。宮城は沖縄での身元引受人になるための書類を整え、保夫たちがパスポートとビザの手続きを始めた矢先に、保夫の家が火事に見舞われる。保夫の母は、夫の写真を取りに戻ったため重傷を負い、沖縄に行くことがかなわなくなる。

沖縄への渡航には、日本の外務省のほかに、米軍政府の許可が必要であるため渡航許可がなかなか下りないのだが、そのことを知らず待ちきれなくなった保夫は羽田から沖縄への密航を決意する。貨物庫に忍び込むが、係員にみつき、保夫の密航未遂事件は新聞に取り上げられる。すると日本中から毎日何百通もの励ましの手紙や渡航許可を求める手紙が届き、保夫は、自分と同じような境遇の人が大勢いることに気づく。

ついに渡航許可が下り、保夫は大使館でパスポートとビザを取り、協力を申し出てきた新聞記者（藤村）と一緒に沖縄に渡る。宮城に迎えられとうとう摩文仁の壕に入ることになるが、この壕の一部は戦争当時から米軍の爆雷でふさがっており、宮城は13年ぶりに入るのだという。保夫たちは宮城の話聞きながら壕の奥へと進み、20数体の遺骨を拾い集める。保夫は無理をして進んだため、沼に足を取られくずれた岸壁や土砂の下敷きに

なり気を失うが助け出され、病院のベッドの上で目覚める。

大事には至らず病院からホテルに戻ると、夜になって保夫の父を殺したという老人（瀬木）が現れる。保夫の父は深い傷を負い、自決しようとしたところ手りゅう弾が不発に終わったため、瀬木に殺してくれと頼み剣を渡したという。瀬木は、保夫の父の最後の様子を詳しく話したあとで、保夫の父から預かった手帳を保夫に渡す。保夫は父が自分のことを気にかけていたことや、家族のために立派に戦ったことを知る。

翌日、米軍の協力で、ふさがっていた洞くつが発掘され、保夫は瀬木と一緒に再び壕に入る。そして、瀬木が保夫の父が持っていた一文銭と頭蓋骨を見つける。保夫たちは次の日、宮城社長や瀬木に見送られ父の遺骨とともに那覇空港を出発する。出発間際に発掘に協力した米軍の中尉がやってきて保夫にオルゴールをプレゼントする。離陸後オルゴールのふたを開けると「サクラ幻想曲」が流れる。保夫は生れてはじめて、戦死した父を誇りに思う気持ちになる。

本小説では、大人の登場人物が川内の思想を代弁し、中学生の保夫にそれぞれの考えとして伝えるというパターンがみられる。

まず、保夫が級友から父親を侮辱されて殴ろうとしたとき、たまたま学校に傘を持ってきた母に止められ、「日本はアメリカやイギリスにいじめられた時、がまんができなかったために戦争をしてしまったんですよ」⁽²⁹⁾と論される。この台詞は、『論争』の連載で、平木が代弁していた不戦の意志に重なる。母親は続けて、「日本の戦争はいけないことだったけど……おとうさんは自分の生まれた国を……この日本を守るために戦ったのです。どこの国の国民だって、自分の国をたいせつにしてるでしょ。それと同じことです」⁽³⁰⁾と、アメリカやイギリスの兵隊を引き合いに出し、日本も同じだと説得する。そして、映写技師に紹介された元兵士の木下も、「戦争は罪悪だけど、その罪悪だということを今日の人間が知ったのは、死んでいった人たちの犠牲によってです。それを忘れてはいかんのでしょう。私は生き残りの兵隊としてそれをつよく感じます」⁽³¹⁾と保夫に言う。このような、悪いのは戦争で、戦争で戦った人は悪くないという主張は、物語の後半に、瀬木老人によって繰り返される。

あぁ、戦争は罪悪だけど……きみのおとうさんは、自分のために戦ったんじゃないんだ。

国と国とが戦った。それぞれにいい分がある。

アメリカはアメリカの、日本には日本のいい分がある。

そういうことが、このごろになってぼくたちにもわかってきた。つまり、きみのおとうさんは、ぼくたちの日本を守るために戦って死んだ。

(中略)

その人たちのぎせいの上に今日の平和があるとしたら、きみのおとうさんの死はけ

っしてむだではないよ。

むろん、バカな死にかたであるわけがない。そんなことをいったら、戦争で死んだ者はみんなバカだということになる。

アメリカの兵隊も、イギリスの兵隊もだ。⁽³²⁾

さらに、保夫の父親の手帳に書かれた遺書にも同様の記述がある。

この子が大きくなるころには日本もきっと平和になってるだろう。

そのための戦いなのだ。妻や子どもをまもるためにおれは戦ってきた。日本に生まれ、日本にそだったものとして、祖国をまもるために戦うのはいたしかたのないことだ。⁽³³⁾

この父親のことは、川内が『遺書』という戯曲を執筆した際に読んだという、特攻隊員の遺書をベースにしていると思われるが、保夫が読んで反芻していることを表す、直後の地の文でもう一度繰り返される。しまいには、最後に登場する米軍人までもが、「ボーイ、わたしたちもわかった」⁽³⁴⁾と保夫に謝罪し、「ヤスオ、きみのおとうさんはゆうかんな兵士だった。日本をまもって戦ったことは、きみのほこりにすべきだ」⁽³⁵⁾と（日本語で？）伝えるという、少し無理があるような設定になっている。いずれにせよ、川内が強調したかった、戦死した兵隊は犬死にしたのではないというメッセージが、あらゆる登場人物を通して繰り返し伝えられている。

そのほか、アメリカ批判（戦争批判）の要素も母親や瀬木らの台詞の中にかがえる。前述の保夫と母の会話の最後で、母が、「これから五年も十年もたてば、アメリカだけが正しいということがいいことかわるいいことかわかってくるかもしれない。それまで待ちましょ」⁽³⁶⁾と、保夫を納得させる。また、瀬木が保夫と藤村記者に戦時中の話をしている際に次のようなやり取りがある。

「アメリカの兵隊が住民を助けるようになったのは」「ずーとあとになってからです。降伏をして助けられたのです。」

「ひどいな、そりやあ。ぼくはもっと、アメリカ軍は人道的な戦いをしたとってたが……」

「戦争はくうか、くわれるかだけです。もともと人道的なものじゃありません。」⁽³⁷⁾

戦死した日本兵の名誉回復が目的の戦記ものである本作で、旧日本軍批判が皆無であることは当然かもしれないが、アメリカ批判、あるいはアメリカだけが正しいというような風潮に対する批判が、『論争』の連載同様に所々にみられる。これは対米コンプレックスの裏返しともいえ、旧日本軍の美化と同様、他の戦記ものに通底する要素の一つであろう。

このように、川内の伝えたいメッセージが十代にむけてわかりやすく込められ、記録映画に偶然父親が映っている、家が火事に見舞われる、密航に失敗する、父親を殺した人物が突然現れるなど、ドラマ性に満ちた本作だが、グラフ誌『ボーイズライフ』の連載小説である本作の最大の特徴として、ふんだんに使用された写真や挿絵などのビジュアル資料と、多くの帯文やキャプション、読者からの反応の掲載が挙げられるだろう。挿絵は作者名（栗林正幸）が記されているが、本作で使用されている写真には出典がなく、キャプションに書かれている場所などの情報が正しいかどうか不明ではあるが、川内が述べていた歴史、真実といった要素を強調し、単に物語を補完するだけでなく、それ等自身が歴史的史料として「真実」を提示している。皮肉にも、あるいは幸いにも、戦闘の写真や避難民の写真などは、製作されなかった映画版で頻出する予定であったシーンと重なり、動員された若者の写真は、テレビ版で特攻隊員として出撃した兵士を彷彿とさせる。以下で、写真とそれに付随する白抜きの帯文やキャプションと読者からの手紙を中心に、物語の外側のテキストについて検討する。

使用されている写真は、戦中の写真と戦後の写真に分けられる。第1回で最初に使用されているのが戦闘の場面で、ジープのような車両からミサイルを飛ばしている大きめの写真と、それにかぶせるように、銃を構えた兵士が斜面にはいつくばっている様子をとらえた小さめの写真が斜めに配置されている。その下に「昭和20年、日本軍はアメリカ軍に、南の島々で刻々やぶれ去っていった！」⁽³⁸⁾という説明書きがある。そのほか、「沖縄島で激戦中のアメリカ海兵隊員」⁽³⁹⁾、「日米彼我の激戦のあと！」⁽⁴⁰⁾というキャプションがついた大小の写真と、「写真（上）動員される学生たち。（中）陣地を構築する沖縄の住民。（下）戦火の中をにげる住民たち。」⁽⁴¹⁾と縦に3枚並べられた写真もある。また、「写真（上）戦死した日本軍軍人の死体（下）沖縄の日本軍陣地のあと」⁽⁴²⁾という写真もあり、物語中に上映される、米軍の撮った記録映画を彷彿とさせるような数々の写真を提示することで、作中で記録映画の描写が終わった後も、写真による沖縄戦の描写は続く。

一変して、第2回以降は、戦後に撮られた写真が使われている。初めに使用されているのが、「沖縄南部戦跡にて」⁽⁴³⁾と説明された写真で、学ラン姿で坊主頭の中学生くらいの少年が追悼文を読み上げている姿が写されている。その上方には、「沖縄で散った父をなぐさめる遺児」⁽⁴⁴⁾という太めの帯が配置されている。もう一枚にも太めの帯で、「激戦のあった摩文仁地区の洞くつ」⁽⁴⁵⁾と記され、洞くつの入り口にかがんだ姿の男女の写真が使われている。ここでは、宮城社長の口から「摩文仁の洞くつ」という言葉が出てくるため、そのイメージを補完するものとして写真が使われている。同時に、その時点ではまだ東京にいる保夫がその後訪れるであろう場所の様子が先取りされて読者に示されている。

第3回で、保夫はついに沖縄を訪れるため、そこで目にしたと思われる、あるいは保夫が訪れる場所に関連した戦跡などの写真が使われている。「これが沖縄の戦いのあとだ」⁽⁴⁶⁾という帯が2枚の写真にかぶさるように配置され、「この草原の中にも、まだ遺骨がうまっているかも知れない」⁽⁴⁷⁾とされた草原にいる少女の写真と、慰霊塔と大地と海が1枚に収

められた写真がある。また、「真珠の塔」と書かれた石碑の下に「私のお父さん」と子供の字で書かれた幕が掲げられた写真には、「沖縄南部戦場で戦死した人の墓」⁽⁴⁸⁾ という説明書きがある。これらの写真にも物語との強い関連性がみられる。

一方で、物語の中で言及はされるが詳細には描かれてはいない、その当時の沖縄の状況を間接的に表しているのが、沖縄を統治していた米軍の写真である。まず初めに、「沖縄那覇（なわ）市にあるアメリカ軍司令部内部」(図1)⁽⁴⁹⁾ と説明された写真が使われており、米軍人の背後には壁一面に沖縄の地図が見える。「沖縄のアメリカ軍司令部」⁽⁵⁰⁾ とされたもう一枚は、軍用車両と兵士などが写された、広々とした野外の写真である。さらに、至近距離で撮られた米兵の横顔と、その背後にジェット機が写った写真には、「沖縄の空には今日も米軍のジェット機がとぶ！」(図2)⁽⁵¹⁾ という帯がつけられている。そして、カメラ目線で微笑んだ少女の背後に米兵と子供たちとバスが写った写真には、「今の沖縄はまったく平和だが…」(図3)⁽⁵²⁾ という帯がついている。この回の前半で「沖縄への渡航には、日本の外務省のほかに、米軍政府の許可が必要である」⁽⁵³⁾ という記述があるのみで、保夫が沖縄に着いたあとも宮城の運転する車で走行中に右側通行であることに気づいたことと英語の看板を見たことが述べられただけで、米軍との接触はないが、かなり多くの写真が用いられ、米軍統治下にある沖縄の様子が紹介されている。

4回目では保夫たちは洞くつに入るため、再び洞くつや慰霊碑の写真が使われている。大きめの洞くつの写真に、「このどうくつで日本人は死んだ！」⁽⁵⁴⁾ という帯と、「写真上は

戦争で死んだ沖縄の少年たちの像」⁽⁵⁵⁾ と記された3人の少年の像が配置されている。そして最後には、「今は平和な糸満の町」⁽⁵⁶⁾ という帯がかかった住宅街の写真を使い、戦時との対比を示すものとして提示されている。保夫は沖縄戦全般については学ぶ機会がなかったようだが、この回にはアメリカ軍上陸に関する地図を使った説明資料「沖縄ではこうして戦われた！」⁽⁵⁷⁾ があり、読者に補足的に解説を提供している。

最終回では、再び「アメリカの砲火でまるやけになった沖縄」⁽⁵⁸⁾ などの悲惨な戦場の写真や、「戦火であれた沖

図 1



図 2



図 3



繩をさまよう子どもたち」⁽⁵⁹⁾の写真が5枚掲載され、「こんな戦争は二度とくりかえしたくない！」⁽⁶⁰⁾、「戦争の責任はだれがおうべきだろうか？」⁽⁶¹⁾という帯で川内の主張や叫びがたたみかけられる。

このように、本作は、登場人物の様子を描いた挿絵だけでなく、多くの写真も使うことにより、物語を補完するだけでなく、新たな情報も提供している。沖縄戦の様子や米軍統治下の沖縄の様子を垣間見せ、作中で簡単に触れられていた、「東西冷戦のために日本と離れ離れにされた」という沖縄の状況を補完し、白抜きの帯を使ってメッセージがちりばめられている。

本作のもう一つの特徴として挙げられるのが、読者からのコメントの使用である。連載1回目に写真付きで作者川内が紹介され、川内の住所とともに、「感想文を出そう！」⁽⁶²⁾という呼びかけがなされている。そして2回目からは、「ぼくにも“太陽は撃てない”と同じ体験がある」というコーナーが設けられ、読者の体験談が紹介されている。さらに、「『ぼくにも“太陽は撃てない”と同じ体験がある』原稿募集！！『太陽は撃てない』の主人公保夫と同じように、太平洋戦争で父、兄などを失った読者の体験記をつのります。20字×10行。ボーイズライフ『太陽は撃てない』係あて」⁽⁶³⁾という案内が追加されている。

それらを受けて2回目から4回目にかけて、合計9人の体験記が紹介されている。以下、掲載順に列記する。

1. 私の父は^{ママ}フィリッピンのミンダナオ島で、昭和二十年九月一日に戦死した。私は生まれて、半月になるやならず。やがても心つくようになって、初めて、どうして父が戦死したのか、どうして母は苦勞するのかについて、考えられるようになった。(大阪府・小川正夫)⁽⁶⁴⁾
2. いつか靖国神社にいったとき、召集令状がきて、母は父にどんな顔をしただろう、父はヨチヨチ歩きだった私と、姉のことが心残りだっただろうと思った。父のからだは遠い国におきざりにされても、その心は今も私の中にある。(山口県・山本悦子)⁽⁶⁵⁾
3. ぼくの父はニューギニアの戦場で死んだ。死ぬとき、ひとりぼっちで、ぼくのことを考え続けて死んだらと思う。母はやけ出されて一文なしから、こつこつお金をためて、今日では一軒の文具屋を持っている。この小説の保夫くんは自分のようだ。(大阪府・野間清敏)⁽⁶⁶⁾
4. 父は昭和十九年十一月六日、ビルマ、モークの激戦で、悲壮な最期をとげた。父は祖国を愛し、世界の平和のために、若いいのちをささげたと、ぼくは死ぬまで

信じるだろう。(茨城県・野口安幸)⁽⁶⁷⁾

5. ぼくの兄は、ビルマのインパールというところで、戦死したそうだ。そこはとてもはげしい戦争があったところだという。ぼくは子どものころから、兄の戦死した土地を見たいと思っていた。保夫くんの気持ちがよくわかる。(松山・村田誠)⁽⁶⁸⁾
6. ぼくら一家は、満州に住んでいた。終戦直後に父は関東軍に召集され、そのまま帰ってこなかった。はっきり戦死したという知らせもない。父は生きていような気がする。(愛知県・田島征)⁽⁶⁹⁾
7. ぼくの父も戦死した。小学生のころ、級友から「きみのおとうさんは戦争でイヌ死にしたんだ」といわれくやしかった。だからこの小説で川内先生が戦争をどう書くかたのしみだ。(札幌・三島由一)⁽⁷⁰⁾
8. 父は、いおう島で死んだということです。戦後、母は多くの人に父の遺骨や遺品をさがしてもらいましたが、いまだにみつかりません。(岡山県・石田継夫)⁽⁷¹⁾
9. ぼくは、兄のいこつが帰ってきたときのことを、おぼえています。白木のはこをあけてみたら、兄の名をかいた紙がはいっていただけでした。保夫のかなしみがわかります。(徳島市・木島功)⁽⁷²⁾

これらが川内宛の手紙だったのか、あるいは出版社宛の原稿だったのかは不明で、体験記の総数も不明ではあるが、掲載された体験記を読む限り、保夫と同じような境遇の子どもが一定程度いたことや、本誌が少年向け雑誌であるにもかかわらず、少女の読者もいたことがわかる。遺族の子どもたちにとって、保夫の物語は自分の物語であり、性別を問わず共感できるものであったことがうかがえる。

また、体験談を送った読者の父や兄が戦死した場所の地名が様々で、彼(女)らの居住地も様々であることから、日本各地から召集された兵士たちが様々な戦地に送られ亡くなったということが示されている。編集者がバランスを考えて体験談を選択した可能性もあるが、いずれにせよ、保夫の物語は特別ではなく、多くの人に共通する体験であるということが、この体験談コーナーで示され、川内が伝えたかったメッセージ(このような人々の犠牲の上に今日の平和がある)を強化する役割を果たしていたといえるのではないか。川内は、読者から生の声を聞くことで、「戦死した兵士は犬死したのではない」というメッセージをくりかえし物語の登場人物に語らせるという筋書きにしたのかもしれない。

さらに、第3回の物語中には「ぼくにも“太陽は撃てない”と同じ体験がある」と類似したエピソードが挿入されている。それは、密航に失敗した保夫への励ましの手紙である

が、内容や名前までもが、読者からの手紙に似かよっている。

新聞を見ました。きみが密航をしようとしたことはよくないけれど、ぼくはきみの気持ちがよくわかるのです。どうしてって、ぼくの父も太平洋戦争で戦死し、いまだに遺骨がわからないからです。

母のはなしによるとインドシナの奥地で戦争が終わってから死んだらしいのですが、どうして戦争が終わってから死んだのかぼくにはふしぎでならないのです。それだけに、きみの悲しみや、きみのおかあさんの気持ちがよくわかるのです。(中略) 野口敏男⁽⁷³⁾

川内が読者からの手紙を参考にしてこのくだりを執筆したのではないかと思えるほど、読者の体験談と似たような文面である。また、同じページに読者の体験談も掲載されており、これらは体験談とメタ体験談のような関係性になっている。本連載に添えられた写真や帯と体験記は、物語を補完するだけでなく、新たな情報を付け加え、フィクションにノンフィクションを混在させることでその垣根をあいまいにしている。つまり、少年小説版『太陽は撃てない』では、実話、挿話、歴史、物語が何層にも絡まった、特殊なテキストが構成されている。

おわりに

戦争体験者であった川内康範は、戦後、「非戦、又は不戦」⁽⁷⁴⁾の意志を強く抱き、その後一貫して遺骨問題を訴えていた。構想に10年以上をかけた『太陽は撃てない』は、劇映画、テレビ映画、連載小説としては不完全なまま完成には至らなかったようだが、少年向け連載小説は、劇映画版の沖縄戦描写、テレビ映画版の特攻隊あるいは兵士の描写、小説版の歴史認識などを少しずつ含み、戦後の遺族の状況と米軍統治下の沖縄の様子を加え、遺骨収集を決行するという形で完結した。公開がかなわなかったとはいえ、同じタイトルの異なる4、5作品にほぼ同時期に取り組み、ライフワークと称して臨んだ川内の思い入れの強さが見て取れ、戦争、正義、平和といった大きなテーマに様々な角度からアタックしたこだわりと執念の作品群であったといえる。

宮城嗣吉にかかわる『太陽は撃てない』は、宮城が沖縄戦末期に壕に入ってから18年後に紆余曲折を経て、異なる媒体で発表された。しかし、映画版で描かれていた宮城の体験談はほとんどわきに追いやられ、住民救出の話は一切出てこず、宮城も数回登場するだけの全く違う内容の『太陽は撃てない』になった。沖縄戦で亡くなった民間の犠牲者への言及もほぼなく、あくまで戦争で父や兄をなくした子供の遺族を慰めるための作品で、沖縄に渡った保夫は、沖縄戦のことはほとんど勉強せずに、父の遺骨を見つけて持ち帰るだけであった。とはいえ、川内が当時一番訴えたかったであろう、戦死した兵士たちの名譽

回復や、沖縄南部などでの遺骨収集の重要性は若い読者にわかりやすい形で伝えられ、沖縄戦やその後の米軍占領下の沖縄についての情報がつまったテキストとして完成した。少年小説版は、実用性や資料性にも重きを置いた少年雑誌という媒体ゆえの自由な表現方法で、ある意味最も多角的に戦中戦後に向き合った『太陽は撃てない』となった。

—注

- (1) 1950年に自作小説が『君が心の妻』として映画化されて以降、計80作以上のシナリオや映画原作・原案を手掛けた(浦崎浩實「映画人、逝く—小川国夫、川内康範」『キネマ旬報』2008年7月上旬号、181ページ)。
- (2) 川内康範『生涯助ッ人』(集英社、1997年)115、122ページ。同書142ページでは1950年と述べられている。
- (3) 川内、前掲書、115ページ、川内康範『俗徒—コウハン潜行す』(東京文芸社、1965年)89~90ページ。
- (4) 川内『生涯助ッ人』120ページ。川内『俗徒』(91ページ)には宮城が17年ぶりに壕に入ったという記述があり、川内と宮城が遺骨収集を行った時の様子が記されている。
- (5) 本作の製作協力に関しては、拙稿「幻の海兵隊協力沖縄戦映画『太陽は撃てない』—製作協力体制構築の過程と破綻」(『インテリジェンス』No.21、20世紀メディア研究所、2021年3月、108~119ページ)参照。
- (6) 1964年に発表された、フランク永井が歌う『太陽は撃てない』の歌詞は以下の通り(全音楽譜出版社、1964年)。(発表時期からすると、テレビ版の主題歌として準備された可能性がある。レコードの裏面は橋幸夫の『あゝ特攻隊』)

| | |
|--|---|
| 一、暗い夜だよ月も泣いてる やがて嵐が来るのだろうか 誰かと誰かが祈りをやめない たとえこの世に終りがこようと ああこころに、こころに抱く 太陽は、太陽は撃てない | 二、星もちりぢり吹く雨風に 野の花さえも明日を知らない それでも誰かが愛しつづける たとえこの世に終りを見ようと ああこころに、こころに抱く 太陽は、太陽は撃てない |
|--|---|
- (7) 星川清司・村山光男『太陽は撃てない』脚本(早稲田大学演劇博物館所蔵)a-1ページ。
- (8) 星川・村山、前掲、a-2~a-3ページ。
- (9) 「仮面を脱いだ月光仮面—『太陽は撃てない』を製作する川内康範氏」『週刊現代』5(40)(講談社、1963年10月)80~81ページ。「テレビ映画」は現在の「テレビドラマ」にあたる。
- (10) 「仮面を脱いだ月光仮面」前掲、81ページ。川内は続けて、無名では世間の反応が得られないため、「売名の仕事を重ねましたよ」と述べている。
- (11) 「仮面を脱いだ月光仮面」前掲、80ページ。
- (12) 「戦争と日本人」を追究する—『太陽は撃てない』近く製作—川内康範作のテレビ映画『毎日新聞』1963年8月7日夕刊、5ページ。川内の特攻隊へのこだわりも終戦直後(1946年)にさかのぼり、特攻隊がテーマの『遺書』という演劇を許可なしで上演しGHQに呼び出されたが、うまく交渉したというエピソードがある。(川内『生涯助ッ人』91~107ページ、竹熊健太郎『筥棒な人々—戦後サブカルチャー偉人伝』河出書房新社、2007年、224~230ページ。)川内は戦場には行っていないが、東京空襲を体験している。
- (13) 「仮面を脱いだ月光仮面」前掲、80ページ、「太陽は撃てない—撮影開始」『論争』27(論争社、1963年9月号)55ページ。
- (14) 中川がテレビ映画を撮り始めたのは新東宝崩壊の翌年1962年からで、そのころは劇映画も撮っていた(川部修詩『B級巨匠論 中川信夫研究』静雅堂、1983年、147ページ)。川内は新東宝時代に中川作品『怪談累が淵』の脚本を執筆している(竹熊、前掲書、234~235ページ)。

- (15) 「戦争と日本人」を追究する」前掲、5 ページ、「国産 TV 映画『太陽は撃てない』製作へ」『読売新聞』1963 年 8 月 8 日夕刊、10 ページ、「仮面を脱いだ月光仮面」前掲、81 ページ、「太陽は撃てない—撮影開始」前掲、55 ページ。山城製薬社長の荻原重秀は元海兵で、終戦を特攻「紫電」で有名な松山基地で迎えた。
- (16) 『ボーイズライフ』1(9) (小学館、1963 年 12 月) 191~197 ページ。
- (17) 「戦争ものテレビ映画—高くつく製作費—人間性も描き切れない?」『読売新聞』1963 年 11 月 21 日夕刊、7 ページ。
- (18) 『論争』は 1959 年 6 月に創刊された雑誌で、創刊号に掲載された論争社社主、遠山景久の「発刊のことば」には次のような理念が述べられている。「今日の社会科学理論の貧困を克服すべく、雑誌『論争』は真に勇気のある自由人の論争の場として人々に紙面を提供し、理論学究のみならず、現実問題をとらえて社会主義運動や労働運動、或いは保守政界や経営者層等、各社会集団のトップクラスの人々にも理解され討議されうるものを誌上に掲載していく」(5 ページ)。
- (19) 「太陽は撃てない」『論争』27、前掲、39 ページ。(一) の昭和 19 年は 16 年の誤りと思われる。小説では昭和 13 年の回想シーンもある。
- (20) 「太陽は撃てない」『論争』28 (論争社、1963 年 10 月) 186 ページ、『論争』29 (論争社、1963 年 11 月) 152 ページ、『論争』30 (論争社、1963 年 12 月) 173 ページ、『論争』31 (論争社、1964 年 1 月) 176 ページ。
- (21) 『論争』30、前掲、182 ページ。
- (22) 『論争』30、前掲、183 ページ。
- (23) 『論争』31、前掲、183 ページ。
- (24) 『ボーイズライフ』1(9)前掲、194~195 ページ。本誌はすべての漢字にルビが振ってあるが、引用の際には省略する。
- (25) 川内は後年のインタビューで、日本人が誤った方向に進んでいると警鐘を鳴らし、「僕は子供向けの仕事でも、いや子供向けだからこそ、この国の現状を直視して、国を憂える心を知ってもらいたい」と述べている (竹熊、前掲書、257 ページ)。
- (26) 鳥越信『児童文学と文学教育』(牧書店、1965 年) 181 ページ。その背景には、体制側の愛国心養成の政策や、安保以降の大衆の無思想的な状況があるという。60 年代後半にブームは終焉する。
- (27) 『日本読書新聞』1963 年 2 月 4 日、7 ページ。
- (28) 川内康範「太陽は撃てない」『ボーイズライフ』1(10) (小学館、1964 年 1 月) 59 ページ。
- (29) 『ボーイズライフ』1(10)前掲、61 ページ。
- (30) 同上。
- (31) 『ボーイズライフ』1(10)前掲、72~73 ページ。
- (32) 『ボーイズライフ』2(2) (小学館、1964 年 5 月)、294~295 ページ。
- (33) 『ボーイズライフ』2(2)前掲、296 ページ。
- (34) 『ボーイズライフ』2(2)前掲、298 ページ。
- (35) 『ボーイズライフ』2(2)前掲、298 ページ。
- (36) 『ボーイズライフ』1(10)前掲、62 ページ。
- (37) 『ボーイズライフ』2(2)前掲、292 ページ。
- (38) 『ボーイズライフ』1(10)前掲、60 ページ。
- (39) 『ボーイズライフ』1(10)前掲、63 ページ。
- (40) 『ボーイズライフ』1(10)前掲、64 ページ。
- (41) 『ボーイズライフ』1(10)前掲、67 ページ。
- (42) 『ボーイズライフ』1(10)前掲、70 ページ。
- (43) 『ボーイズライフ』1(11) (小学館、1964 年 2 月) 264 ページ。
- (44) 同上。
- (45) 『ボーイズライフ』1(11)前掲、268 ページ。
- (46) 『ボーイズライフ』1(12) (小学館、1964 年 3 月) 283 ページ。

- (47) 『ボーイズライフ』1(12)前掲、282 ページ。
- (48) 『ボーイズライフ』1(12)前掲、294 ページ。
- (49) 『ボーイズライフ』1(12)前掲、282 ページ。
- (50) 『ボーイズライフ』1(12)前掲、288 ページ。
- (51) 『ボーイズライフ』1(12)前掲、291 ページ。
- (52) 『ボーイズライフ』1(12)前掲、296 ページ。この写真は、米国民政府の「琉米親善」という広報政策、つまり、アメリカ人と現地人の友好関係を強調するイメージ戦略で使用される写真等に類似している。
- (53) 『ボーイズライフ』1(12)前掲、283 ページ。
- (54) 『ボーイズライフ』2(1) (小学館、1964年4月) 298 ページ。
- (55) 同上。
- (56) 『ボーイズライフ』2(1)前掲、302 ページ。
- (57) 『ボーイズライフ』2(1)前掲、296～297 ページ。
- (58) 『ボーイズライフ』2(2)前掲、295 ページ。
- (59) 『ボーイズライフ』2(2)前掲、296 ページ。
- (60) 『ボーイズライフ』2(2)前掲、292 ページ。
- (61) 『ボーイズライフ』2(2)前掲、296 ページ。
- (62) 『ボーイズライフ』1(10)前掲、68 ページ。
- (63) 『ボーイズライフ』1(11)前掲、266 ページ。
- (64) 『ボーイズライフ』1(11)前掲、263 ページ。
- (65) 『ボーイズライフ』1(11)前掲、265 ページ。
- (66) 『ボーイズライフ』1(11)前掲、266 ページ。
- (67) 『ボーイズライフ』1(11)前掲、269 ページ。
- (68) 『ボーイズライフ』1(12)前掲、286 ページ。
- (69) 『ボーイズライフ』1(12)前掲、288 ページ。
- (70) 『ボーイズライフ』1(12)前掲、292 ページ。
- (71) 『ボーイズライフ』2(1)前掲、299 ページ。
- (72) 『ボーイズライフ』2(1)前掲、302 ページ。
- (73) 『ボーイズライフ』1(12)前掲、287～288 ページ。
- (74) 川内『生涯助っ人』366 ページ。

*本研究は JSPS 科研費 (16K02319、17K02060) の助成を受けたものである。